

## [講演要旨] 1855 年安政江戸地震の出火点と延焼域の再検討

中村 操((株)防災情報サービス)・松浦 律子((公財)地震予知総合研究振興会)

### § 1. はじめに

安政江戸地震は安政二年十月二日(1855 年 11 月 11 日)に東京湾北部を震源として発生した。地震の規模はほぼ M7。江戸或いは東京を直撃した地震としては、最大の被害地震である。地震のすぐ後に火災が発生。約 1.5km<sup>2</sup>(中村・松浦, 2005)を焼いて翌日鎮火した。主な焼失地は千代田区, 中央区, 台東区, 墨田区そして江東区であった。

ここでは、奉行所の行った調査(「安政地震焼失図」史 1)及び他の文字史料から出火地点を特定した。文字史料とは次の 6 史料を指す。

- 「武江地動之記」 斎藤月岑(史 2)
- 「時雨廻袖」 畑 銀鷄(史 3)
- 「破窓の記」 城東山人(史 4)
- 「地震類焼場所明細之写」(史 5)
- 「江戸大地震出火明細記」(史 6)
- 「安政見聞誌」 斎藤月岑(史 7)

### § 2. 地震時の気象条件

地震当日の気象は、午前中は小雨、午後には止んで夜にはわずかに風が吹いていた。旧暦二日の四ッ時(午後 9 時 21 分ごろ)であるから、月は沈み、外は暗闇であった。

### § 3. 各出火点の状況

江戸市中と周辺についての出火および延焼の様子を、史料から見よう。焼失の最も大きい地点は千代田区大手町から皇居外苑、日比谷公園に至る地域と神保町一帯である。ここは日比谷の入江を埋め立てた軟弱な地盤であるため、揺れが強かったことと関連づけられる。神保町も同じ理由による。

千代田区大手町

「竜の口角森川出羽守様焼る。大手前は酒井雅楽頭様やける、表御門残る。御向屋敷焼る」(史 5)。

千代田区神保町

「堀田備中様(十一万石)大に焼る。向側にては半井出雲様一軒焼る」(史 5)。大いに焼ける、ということから出火点の一つと考えることもできる。

中央区明石町

「銭炮洲十軒町、松平淡路守殿共一口、此火元十軒町鉄三郎店亀次郎也」(史 4)。

中央区京橋

「南大工町より燃たち京橋邊一圓焼失す。凡長五町餘、幅平均二丁程」(史 2)。また、「南鍛冶町巷丁目狩野探原屋敷、(中略)柳町、炭町、此火元南鍛冶町巷丁目家主長兵衛、同町庄兵衛、く斯る変事に依

て人にはからずも家を捨て退きのがれたる後にあやまちて家より火の出るものは、おのづから皆家主の罪を得るもの也」(史 4)。城東山人は詳細な記述と火災の責任を主張している。一方、斎藤月岑は淡々と事実のみを記している。

台東区下谷

「下谷坂本寺丁目、弐丁目、参丁目、一口、此火元参丁目五人組持居医師清庵也」(史 4)。また、「下谷坂本町方燃立、右兵衛店静安」(史 1)。出火元前者は医師、後者は商人としている。名前の読みは共通しているので、どちらかの聞き違いであろう。前者が正しいようにも思える。

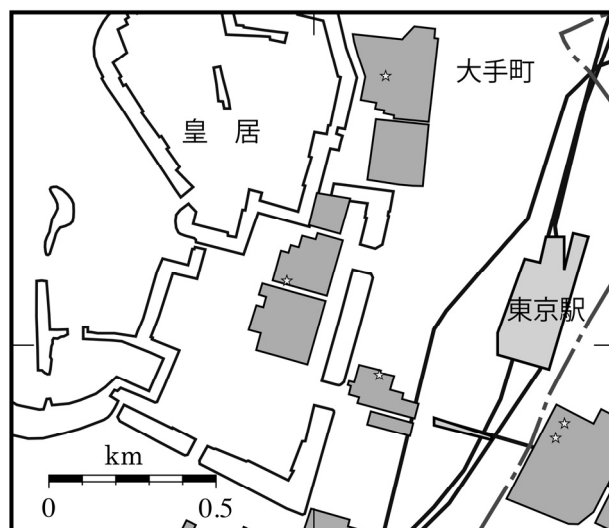


図 1 大手町周辺の焼失域。星印は出火点

### § 4. おわりに

地震に伴った火災により凡そ 1.5km<sup>2</sup>が焼失した。火災の出火については、史料で判明しているだけで 54 点あるが、焼失した場所で出火点が見つからないところも多くある。これらの中で独立した場所は、当然その中に出火点があるはずである。そのことを考慮すると、163 点以上の火元があったことになる。

地震当日は天候が幸いしたと考えられるが、ここまでの大きな火災となった。また、大震度に襲われた水戸藩上屋敷(文京区後楽)では火災の発生を食い止めた家臣がいた。彼女の名は西宮秀。「御殿へ引き返し、御手あぶり、御あたため、火鉢など火の本あぶなく、そのまま御泉水へ投げ込み、金魚や緋鯉はふびんに思うけど、致し方ない」という行動に出た。文京区からは小領域が焼けただけで済んだ。江戸の前島に位置する、揺れの小さかった中央区京橋の大火災とは対照的な結果となった。